凡例……vii
解説……一
『阿兜夷経』解題……三
『善生経』解題……六
『清浄経』解題……一〇
『自歓喜経』解題……一二
『大会経』解題……一四
『阿摩昼経』解題……一三
本文……二九
阿兜夷経　本文……三一
善生経　本文……六三
清浄経　本文……八五
自歓喜経　本文……一一三
大会経　本文……一三五
阿摩昼経　本文……一五一

注……一九七
阿兜夷経　注……一九九
善生経　注……二二三
清浄経　注……二四七
自歓喜経　注……二六三
大会経　注……二八三
阿摩昼経　注……三一七
分担・初出一覧……三五二
『長阿含経』構成表……三五三
訳注者一覧……三五四

凡例

一――本シリーズは全六巻で、『長阿含経』二二巻三〇経について、それぞれ解題・現代日本語訳・原文・注を収める。第3巻は『阿兜夷経』、『善生経』、『清浄経』、『自歓喜経』、『大会経』、『阿摩昼経』を収めた。本シリーズ全体の意図や方針については、第1巻のはしがきを参照されたい。また、『長阿含経』全体については、第1巻の解説に記した。

二――底本としては、高麗大蔵経所収本（韓国東国大学校影印版、第一七巻）を用いた。校本としては、『大正新脩大蔵経』第一巻所収本の校注に収められた宋・元・明三本、及び磧砂蔵本（台湾新文豊出版影印版、第一七巻）を用いた。底本の文字を改めた場合は、本文に＊を付し、注にその旨を記した。なお、参考までに、本文欄外に大正蔵本の頁・段を注記した。

三――訳文は、訳者によって相違するところがあり、必ずしも無理に統一を図らなかった。しかし、同一経典内では、主要な用語に関して可能な範囲で統一を付けるようにした。

四――注においては、必要に応じて略号を用いた。

（1）――全体に関する主要な略号は以下の通り。

赤沼『固有名詞辞典』　赤沼智善編『印度仏教固有名詞辞典』　法蔵館